

4-1-10-4 胎児診療科

1. 概要、特色

1.1 胎児診療科

胎児診療科とは胎児医療を行う専門診療科で、胎児を母体に附属したのではなく、独立した個人として認め胎児を専門的に診療していくものである。当科の目的は、子宮内の胎児に対して最善の医療を提供することであり、診療の柱は「胎児診断」と「胎児治療」である。

1.2 胎児診断

高精度胎児超音波検査、胎児 MRI、羊水検査に加えて、絨毛検査、臍帯血検査も行っている。胎児に異常が見出されたり、異常が疑われたり、また胎児に異常がでる可能性が高いと推定される妊婦を対象とし、各種検査を適切に行い胎児のより正確な診断を行っている。正確な診断によりはじめて胎児治療や出生後の適切な治療が可能になる。また遺伝診療科と連携して、染色体・遺伝子検査前・後の「遺伝カウンセリング」が受けられる体制を整えている。

1.3 胎児治療

胎児治療の対象となる疾患はまだ限られているが、胎児胸水に対する穿刺・シャント術、胎児尿路閉鎖症に対する胎児膀胱穿刺・シャント術に加え、無心体双胎に対するラジオ波凝固術や双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術など、幅広くまた新しい胎児治療法に積極的に取り組んでいる。今まで（平成 17 年 12 月末）に無心体双胎に対するラジオ波凝固術は計 6 例、双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術は計 34 例に施行し、良好な成績を得ている。双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術は平成 17 年 9 月にわが国ではじめて高度先進医療に認定された。また新生児科・神経科と連携し、胎児治療例の長期フォロー・アップを積極的に進めるとともに、胎児治療の普及や新しい胎児治療法の開発に取り組んでいる。

1.4 チーム医療

胎児診断・治療は多領域に関連するので、チーム医療が不可欠である。適切な方法を用いて的確な胎児診断を行い、産科、新生児科、小児外科、循環器科、放射線科、脳外科、泌尿器科、麻酔科、特殊診療部など各専門診療科と連携・協力して、最善の出生前の管理・治療（胎児治療）や出生後の治療を提供している。出生前に当科、新生児科をはじめ関係各科が一同に会し、胎児の診断、予想される予後、出生前・後の治療法のオプションなどについてご夫婦に詳しく説明する機会を設けている。また毎週月曜日の夕方胎児カンファレンスを行い、症例検討とともに各科の連携を強化している。胎児や出生児に異常が認められた妊婦の「心のケア」にもこころの診療部や看護師・ソーシャルワーカーと連携して取り組んでいる。

2. 診療活動、研究活動

2.1 胎児診断検査

他院からの紹介やスクリーニング超音波検査で胎児異常が疑われる症例に胎児精査超音波検査を行っている。また必要に応じて放射線科で胎児 MRI を行い診断の補助としている。検査の意義、限界、リスクなどについて十分説明した上で、希望者には羊水検査、絨毛検査、臍帯血検査を行っている。これらの検査をもとに胎児の正確な診断に努めている。

2005年1月1日 12月31日

検査名	件数
胎児スクリーニング超音波検査	2574件
胎児精査超音波検査	870件
胎児MRI	168件
羊水検査	189件
絨毛検査	4件
臍帯血検査	0件

2.2 胎児異常例の内訳

2005.1.1-12.31の1年間に当科にて診療した胎児異常例は計229例であった。その内訳と内容の概略を以下に示す。中枢神経系異常であれば脳神経外科、心・大血管系異常であれば循環器科、胸部・腹壁・消化器系異常であれば小児外科、泌尿器系異常であれば泌尿器科、染色体異常・奇形症候群であれば遺伝診療科と、関係する各科や新生児科と出生前から連携を密にとり診療にあたっている。

2005年1月1日 12月31日

臓器	例数	主な内容
中枢神経	26例	脳室拡大・水頭症(8)、髄膜瘤(4)、無脳症(6)
顔面・頸部	2例	口唇口蓋裂(1)、頸部腫瘍(1)
胸部	25例	先天性横隔膜ヘルニア(10)、CCAM/肺分画症(11)、胸水症(3)
心・大血管	31例	不整脈(11)、DORV(6)、内臓錯位(3)、CoA(3)、VSD(1)
腹壁	4例	臍帯ヘルニア(2)、腹壁破裂(2)、
消化器	5例	小腸閉鎖(2)、食道閉鎖(1)、胎便性腹膜炎(1)
泌尿・生殖器	30例	水腎症(10)、MCDK/PCK(9)、Potter(3)、卵巣嚢腫(2)
四肢・骨格	5例	
多胎	40例	双胎間輸血症候群(23)、無心体(4)
発育異常	8例	
胎児水腫	4例	
染色体異常	24例	18トリソミー(10)、21トリソミー(6)、13トリソミー(4)
奇形症候群	11例	
その他	14例	
計	229例	

2.3 胎児治療

胎児治療の適応となる疾患は限られているが、各種胎児治療法を幅広く行っている。その中で双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術が17例(2003年は11例)と一番多く、また急増している。治療成績も良好である。また胎児頸部腫瘍に対してEXITを1例施行した。

2005年1月1日 12月31日

術名	例数	適応疾患
薬物療法	0例	胎児不整脈
胸水吸引	3例	胎児胸水
卵巣嚢腫吸引術	1例	胎児巨大卵巣嚢腫
膀胱・腎盂穿刺	1例	巨大膀胱・水腎症
胎児輸血	0例	胎児貧血
胸腔・羊水腔シャント術	1例	胎児胸水、肺分画症
肺嚢胞・羊水腔シャント術	1例	CCAM
膀胱・羊水腔シャント術	1例	下部尿路閉鎖
無心体ラジオ波焼却術	1例	無心体双胎
胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術	17例	双胎間輸血症候群
EXIT	1例	頸部腫瘍
計	27例	

2.4 研究活動

昨年度に引き続き、以下の研究を行っている。臨床研究としては、1)新しい胎児診断法の確立
先天性横隔膜ヘルニアの予後予測に向けて超音波診断法とMRI診断法を組み合わせた胎児診断法の確立を試みている。2)胎児治療成績の臨床的検討 いまだ実験的医療である各種胎児治療法の治療成績の解析。特に長期フォローアップできる体制の確立を目指している。3)胎児治療成績向上に関する研究 双胎間輸血症候群における胎盤の検討を病理検査科と共同で行い、双胎間輸血症候群の発症原因となる胎盤吻合血管の詳細な解析により胎児鏡下レーザー手術成績の向上を目指している。また基礎研究としては、1)ダウン症の分子遺伝学的研究 ダウン症のマウスモデルを用いてダウン症の中枢神経異常の病態メカニズムを分子遺伝学的に解明しようというプロジェクトで理化学研究所・脳研究センターと共同研究を行っている。ダウン症の病態メカニズムを明らかにすることにより、ダウン症患者の生活の質の向上を目指すものである。2)幹細胞移植研究 幹細胞を用いた遺伝性疾患の胎児治療を目指して、自治医科大学と共同で基礎的研究を行っている。

2.5 今後の課題

診療した胎児異常例は200例を越えた。NICUの収用能力を考えると、当センターで妊娠・分娩管理できる症例数には限りがある。的確な胎児診断により治療方針をたて、症例によっては紹介先や地域の中核病院、他の周産期センターなどへ紹介して管理していただくことが今後は多くなる。各地域の胎児診療に関連する各科：産婦人科、新生児科、小児科、小児外科、小児循環器外科、小児泌尿器科、小児脳外科と連携を密にし、紹介、逆紹介がスムーズにできるようなシステムの構築が急務である。